栞集を読む

松岡　隆子

梢より飛び立ちさうな花辛夷　　高野　達子

一読して青空と真っ白な辛夷の花が見えてくる。早春の風に吹かれながら花辛夷を見上げている作者の姿も見えてくる。ひらひらと吹かれる梢の花はいまにも飛び立ちそうだ。同じころに咲く白木蓮に比べると、辛夷の花は小振りで花びらが開き切りひらひらと吹かれやすい。辛夷の花ならではの景である。早春の息吹が清々しい。

青き踏むワクチン接種了へてより　　矢作　裕子

やっと一度目のワクチン接種も終わった。心も晴れやかに野に出て遊ぶ。萌えだした草の青さが目に沁み早春の日ざしが目映い。冬眠から覚めた虫たちのように眩しさにうろうろする感じだろう。〈ワクチン接種了へ〉というだけでコロナ禍の日々へ思いが至る。それを〈青き踏む〉で展開して見せた。五七五と季語からなる俳句の力を思う。

下町の通り変らず草の餅　　河本　順

下町は私たちにとっては格好の吟行地である。浅草、上野、深川、谷中・根津・千駄木、月島・佃と挙げれば限がない。最近は観光スポットとしても人気が高まっている。古き良き時代の面影が残る下町風情が人気の的のようだ。昔のままの通りには代々続く老舗の店も多い。河本さんが訪ねた下町通りには草餅の美味しい店があるらしい。創業以来守り継がれてきた草餅の味は絶品であろう。

晴れやかな日は晴れやかに花の昼　　宮内　一昭

全く説明する必要のない句であるが、晴れやかな日は思いっきり晴れやかに、と言い切っていて気持ちがよい。〈花の昼〉ともあれば晴れやかさも一入だ。コロナ禍の憂さを吹き飛ばすような晴れの句に元気を貰った。

ふだん着を着替へてみたる四温かな　　田辺　文枝

寒入りから節分までの約三十日間は、一年のうちで最も寒さの厳しいときである。それでも後半になると三寒四温となり寒暖の変化を繰り返しながら春になってゆく。四温日和のひと日、厚手のセーターを脱ぎ薄手のものに着替える。ただふだん着を着替えただけなのに、待春の思いに心がうきたつ。〈ふだん着〉という言葉は日常語ながら味のある言葉だ。飾らない日常が思えて温かい。